

# 原爆文学研究会報

第一五・一六号

原爆文学研究会 二〇〇五年一〇月

## 第一五回研究会と第一六回研究会・シンポジウム

本会報では、第一五回原爆文学研究会と第一六回原爆文学研究会・公開シンポジウムについて報告いたします。

第一五回研究会は、二〇〇五年七月一六日（土）九州大学六本松キャンパスで開催しました。発表者は中野和典氏と野坂昭雄氏。

中野氏の発表については「夕風と心象風景をめぐる問題は」イメージの戦略」をめぐる議論と接続できるのではないか」「小説中で



第15回原爆文学研究会（2005年7月16日）

広島市」と表記せずに「H市」としているのは、なぜか」等の質疑がありました。

野坂氏の発表については「『水滴』の受容のされ方の差異をどのように考えたら良いのか」「戦争体験から生まれる」やまさ」とレトリックとしての「言いよどみ」との関係をどのように整理すべきか」等の質疑がありました。



第16回原爆文学研究会（2005年9月10日）

第一六回原爆文学研究会・公開シンポジウムは、

二〇〇五年九月一〇日（土）九州大学六本松キャンパスにて開催しました。このシンポジウムは、

九州大学P&Pプログラム「九州」という思想との共催により実現したものです。「原爆をどのように語りうるかー原爆を描くこと、受容することをめぐって」を会全体のテーマとし、小沢節子氏、直野章子氏、田崎弘章氏から

の基調講演の後、参加者全員で討論を行ないました。

小沢氏は、絵画や文学等の表現の形式を越境的に関係づけて批評することの可能性について、直野氏は政治的・法的な言説における「被爆者」の成立とその問題について、田崎氏は「後日談」として語られる「長崎原爆文学」に見られる問題について講演を行ないました。（詳細は「原爆文学研究」増刊号に掲載予定。会報末参照。）

◇ 研究発表1 (第一五回原爆文学研究会 二〇〇五年七月一六日)

## 心象風景としての被爆都市

中野 和典

失われゆく風景は内在化する。道・建物・水路——人間は自分を  
取り巻く環境を改変しつつ生きていく。その改変とともに風景は更  
新され、特別な場合を除いて復元されることはない。そして「実在」  
のものでなくなつた風景は人々の内面に宿り、ときに生彩を失わず  
にかけがえのない記憶となる。それは繰返し想起される中で、細部  
の強調や配置の転換といった変形を避けられないにしても、長く心  
象として在り続けるだろう。風景は幾何学的な均質空間ではなく、  
様々な歴史や物語と結びついた意味的な場所なのである。

変形を避けられない、と言うとあたかもその風景が失われる以前  
に「実在」した、客観的な(個々人との関わり以前に存在する)唯  
一の風景を想定しているような印象を与えるかもしれないが、そう  
ではない。人間はある風景が失われる以前に、すでに主観を滑り込  
ませて眼前の光景に向い合うのであり、そのような意味においては  
現前する「実在」の風景さえも心象的だと言えるのである。したが  
って変形は程度の問題であり、その風景が「実在」のものであるか  
否かは本質的な問題ではない。

多くの物語にとって風景描写は不可欠のものであるが、風景にと  
ってこそ物語が不可欠であると言わねばならないだろう。空間は物  
語と結びつくことによって初めて風景になる。したがって、失われ

内在化してゆく風景を描いた物語は、独特の機能を持ち得る。その  
ような物語は、単に失われゆく風景を記録するにとどまらず、心象  
としての風景に新たな意味を付加し、現実的な力を与えるのである。  
失われゆく風景の物語は、「実在」の風景の歴史性を前景化し、その  
自明性に鋭い問いを投げかける。

心象風景という観点から見て、被爆都市には他の場所にはない二  
つの注目すべきことがある。一つは爆心を中心として瞬時に都市が  
壊滅したということである。終戦間際、日本中の都市が空襲を受け  
たが、被爆都市ほど短時間に高密度で破壊された都市はない。忽然  
と出現した原子野に対する強烈な違和感は、壊滅以前の風景を鮮明  
に印象づけ、内在化させるものだっただろう。もう一つは、被爆都  
市が「平和都市」という自己了解にもとづいて都市を再建している  
点である。特に「広島平和記念都市建設法」と「長崎国際文化都市  
建設法」に基づく爆心地周辺の景観の変貌は、風景の内在化に独特  
の屈折を与えているようである。

以上のようなことを念頭に置きながら、今回の発表では、新藤兼  
人の映画『原爆の子』『母』に見られる「被爆都市」の風景を紹介し  
た後、大田洋子『夕風の街と人と——一九五三年の実態——』に注目し、  
心象風景としての被爆都市の表象が持つ可能性を検討した。小説に  
ついては、まず主人公・篤子がフィールド・ワークを通じて目にす  
る被爆都市の変貌とその問題点を整理した。次にそれをとらえる作  
家の位置に関する問題について考察を加え、最後に、心象風景とし  
ての被爆都市の表象を支える「夕風」の機能について論じた。

## 峠三吉の詩

—— 目取真俊「水滴」と戦争詩を補助線として ——

野坂 昭雄

発表者が「原爆」を考える際、自分の発想を支えるいくつかの印象深い言葉がある。原爆文学研究会の席上、あるいは原爆に関する論文・エッセイの中で生み出されたそれらを挙げればキリがないが、例えば花田俊典氏が「原爆の再問題化のために」(『敍説』十九号)で引用している石原吉郎の「峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨を特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによつて先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である」という言葉。原爆文学研究会での長野秀樹氏の「健康な原爆文学があつてもいい」という言葉。川口隆行氏が『西日本新聞』(二〇〇四年九月二二日)紙上に書いている「加害者への想像力」(「自分の存在自体が赦しがたき他者、すなわち誰かにとつての加害者であるかもしれないことに、とことん思いを巡らすこと」という言葉。もちろん、他にも数多くある。

これらの言葉に出会い、原爆文学というものを自分なりに考える手がかりが得られた気がする。恐らく原爆文学は、「何のために書くのか」という文学に関する問いを、もっとも先鋭化させたジャンルであろう。そのため、個別の作品に取り組むことはもちろんだが、原爆文学全体を捉える発想の枠組みのようなものも、また必要にな

ってくる。ただし、それは固定的な理論ではなく、むしろ積み上げでは自ら壊し、また積み上げるといった作業の繰り返し、終わりのない思考でなければならぬだろう。原爆文学研究会は、自分にとつて、そうした自壊と再構築の場である。

現段階では、個々の原爆文学作家が作品を書く際に、一般化に対してどのような関わり方をしているのか、に関心を持っている。例えば、自らの被爆体験を書く場合、「体験を言葉にすることは不可能だ」という思いと、「この悲惨な出来事を伝えねばならない」という思いとに、作家は引き裂かれねばならないだろう。もし前者の思いが失われれば、それは多くの人々に共有可能な、耳障りのよい言葉を生産するだけになりかねない。だが、人類史上類を見ない原爆という出来事を前に「沈黙」することも不可能な場合、作家はどのような「言葉」を紡ぎ出すのか。この矛盾、葛藤そのものに対して耳を傾けることで、原爆文学の特質がある程度理解出来るのではないかと考えている。

今回の発表では、特に峠三吉の『原爆詩集』にこうした問題を読み取ろうと試みた。未だ考察不足な点や問題も多いが、峠の作品には上に述べたような引き裂かれた状況の、かすかな残響が聞き取れるように思う。例えば、研究会の席上でも問題となった序詩は、推敲によつて現在の簡潔な形となり、多くの人に共有される印象深い詩となった。ここでは伝達性が全面に押し出されている。だが一方で、優れた詩人として言葉を彫琢し、伝達の可能性と不可能性との間で揺れ動いているような作品も見られると考える。

参加者の皆さんからいろいろなご指摘をいただいたので、今後はさらに峠の詩を細かく分析して、より明確な形で自分の問題点を提示できるよう努力したい。

## 彙報

### 第一五回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇五年七月一六(土) 一三時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一教室
- 内容 研究発表

心象風景としての被爆都市

中野 和典

峠三吉の詩―目取真俊「水滴」と戦争詩を補助線として―

野坂 昭雄

### 第一六回 原爆文学研究会・公開シンポジウム

- 日時 二〇〇五年九月一六(土) 一三時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス本館・第一会議室
- 内容 基調講演

原爆をどのように語りうるか

―原爆を描くこと、受容することをめぐって― 小沢 節子

「原爆被害」をめぐる表象・闘争の場

―日本政府の被爆者対策と被団協・在韓被爆者運動から―

直野 章子

後日談としての長崎原爆文学―女性視点と日常性―

田崎 弘章

## 機関誌 「原爆文学研究」 増刊号原稿募集!

第一六回原爆文学研究会・公開シンポジウムを記録することを第一の目的として、二〇〇六年三月に機関誌「原爆文学研究」増刊号を発行する予定です。左記の要領で原稿を募集いたします。シンポのテーマ「原爆をどのように語りうるか」をめぐる論考もお待ちしております(募集はこのテーマに限りません)。

○書 式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇六年一月中旬、データファイル (Word か 一太郎) を添付しての投稿の場合は一月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 原爆文学研究会事務局。データファイルの場合はプリントアウト原稿を添えて郵送して下さい。

※ 第一七回原爆文学研究会は、二〇〇五年一二月某日、広島にて開催予定です。詳細は後日。

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四一一一

九州大学大学院比較社会文化研究院 石川巧研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail [ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>